

小学校低学年における

文字指導

——ひらがなと漢字の指導——



石田 佐久馬

わが国の文字指導は、小学校の低学年から複雑な要素をかかえています。ひらがな、漢字、かたかな、それに算数のアラビア数字があり、四年生からローマ字が登場します。

語い指導の一部として文字を教えながら、小さい単位の一字一字を教えるために特別な配慮と練習がいるという点にわが国の文字指導の特ちょうがあるといえましょう。

文字は、ただの文字として指導するのではなしに、事実↓ことば↓文字 この手順をふまえて、三つをばらばらにしない指導をしなければなりません。

△入門期の指導▽

文字の認知を正確にする第一歩は、形をしっかりとらえるということから始まります。

入門期にいきなり文字を与えることは無理ですから、まず図形の認知からみちびきます。

たとえば、同じような花をたくさんかいておいて、その中で一つだけちがった花を見つけさせるとか、人の顔を描いておいて、丸顔の中にやや長方形の顔を入れておくとか、部分的に不足した絵にたりないものを付け加えさせるなどして、図形を注意ぶかく見る態度、図形のちがいを見つける技能を育てていきます。そうして、しだいに抽象的な図形の差異を弁別する能力が高まったところで文字に切りかえます。

こういう指導は、ふだんの家庭生活の中でごく自然に行なわれている場合もあり、また幼稚園などでも指導されています。

△ひらがな指導の方法▽

ひらがなを指導するのに、およそ次の三つの方法があります。

A 一字一字の読み方を教える方法

一名「五十音図表式」ともいいます。事実↓ことば↓文字の逆のやりかたです。この字は「あ」だとか、この字は「た」だとか、この字は「ま」だとか教えて、「あたま」ということばをわからせようとします。いかにも能率的であるようですが実際には、一

字一字の拾い読みのくせがつきやすい欠点があります。字一字の読みはわかって、ことばとして読めない、つかめないのでは文字の機能を理解したことはありません。

B いくつかの単語を与えて共通する文字を教える方法

ハタ タコ コマ (黒表紙本・明治—大正初期)

ハナ ハト マメ マス (白表紙本・大正初期—昭和初期)

これは、同じ音のくりかえしを利用して、文字は音にかわるものであり、文字の集まりを音声化すればことばになるということを理解させる方法です。

C 短い文を与えて、その一部の文字を教える方法

サイタ サイタ サクラガ サイタ (サクラ読本・昭和中期)

アカイ アカイ アサヒ アサヒ (国民学校読本・戦中)

おはなを かざる みんな いいこ (戦後)

これらは、律動的な叫び声や童謡調の親しみやすい短文を手がかりとしたもので、単語法にくらべるとしだいに生活言語に近づいています。

ところが、戦後アメリカの示唆によって、

たろうさんは まりなげを しました。

はなごさんは ぶらんこを しました。

よしごさんは いしけりを しました。

このように文を並べ、同じ語のくりかえしによって、文字群をま

とめてとらえさせる指導法がとられました。これによれば、ことがら(子どもの経験)と、ことばの結びつきがたやすく、また共通の文字(語形)の視覚映像を作らせるのにつごうがよいなどの利点があります。

しかし、語形読みが一字ずつの読みに優先するということは、日本語では当てはまらないのです。

「あいうえお」……の五十音を知っていれば、日本の文章(かな書きの)が読めるし、また書けるという恩典をじゅうぶんに生かした指導が大切だと思います。

そこで、ひらがな指導ではABCの方法を組み合わせて、次のような方法をとります。

(1)まず文章の中の語として読む。(はさみ読みなどの方法で)しかも「さくら」という孤立した語ではなく、「さくらがさいている」という意味を表わす文の一部としてとらえさせる。

(2)それは、「さ・く・ら」という文字からできていることをわからせる。一字一字を正しく読むこと、書くことを通して、いっそう確かなものにする。

(3)「さ」は「さんま」の「さ」、「さかみち」の「さ」、「さざんか」の「さ」であるというふうな抽象化する。

このように、具体的な事物と結びつけ、文字群として音声化するといったコースをとれば、一字ずつの拾い読みのくせがつかず、しかも一字一字を確実におぼえていくことができます。

ひらがなを身につけさせるには

子どもにとっては文字は一つの絵であり記号でもあります。画を落したり、筆順をまちがえたり、左右反対に書いたりしても平気です。

初めのうちは、読むことと書くことを並行させないで、読むことを先に進め、ある程度正しい形をのみこんでから、書く指導にはいったほうがよいとされています。

正しい字形を認知させる方法には、次のようなやり方があります。

○実物と関連つけて興味をもたせる

人の形、木の形、動物の形などを文字化する。

○形の似た字を集める

これらは、まちがいやすい字であるから形のちがいをはっきりさせる。

ぬーめ るーろーら まーも わーねーれ はーほ ばーば

ーぼ さーせ けーさ

○同じ方向の線の字を集める

よーなーね てーそ のーおーあ とーを しーも すーむ

○しりとり遊び

○まちがいさがし

鏡文字をなおす。画の多すぎるもの少なすぎるものを正しくする。点や画の方向のまちがいを正しくする。

○フラッシュカードを使う。

・一字ずつ書いた小さなカードを机上に並べさせ、教師は大き

なカードをばつと示して、それと同じカードを拾わせる。

・フラッシュカードに、一字だけちがった字を書いておいて、見つけさせる。(め)

あ あ あ め あ

・形の似た字をたくさん書いておいて、教師の言った字を見つけてさせる。

ね れ わ ぬ や む

○正しい表現を見つけさせる

ひ よ こ

ひ お し が り

し よ こ

ひ よ し が り

ひ よ こ

し お ひ が り

子どもが困難を感じる字は、画数が多いとは限りません。特ちょうのない形、あまり目にふれない字、類型の多い字、字形の複雑な字などです。

文字の形・音・義の三要素をふまえて、たえずくりかえし練習を行なうことが大切です。

△漢字指導の方法▽

漢字指導となると、おもむきを異にします。それは漢字が表意文字であるということです。

したがって漢字を読むはたらしきは、意味を理解するはたらしきと密接な関係があります。漢字を見てすぐ意味を思い出すことができるのは、漢字の特ちょうだといえましょう。しかしその反面、字形が複雑で画数も多く、それに読み方(音訓)がいくとおりもあって、漢字学習の難所になっています。

(1) 正しい字形を認知させる

何をおいても、形をしっかりと見させることが大切です。象形文字なら絵と関連つけて指導し、形声文字なら形の似ている字との比較によって明らかにします。

特に、低学年の漢字は象形文字が多いので事実を絵にし、しだいに文字化していく経過を明らかにすると、漢字に興味をもつ一方漢字が表意文字であることも理解します。

また、

×雨が山^{やま}なので、おかあさんがくるまでまっています^た田。

×すずめがたのし^きそうにな^まます。

のような漢字の誤用がなくなってくるでしょう。

(2) 漢字の読み方を理解させる

文中の漢字は、なるべく文脈にそってその意味や読み方を考える習慣をつけさせます。また、その語の前後の関係から類推することも大切です。

読めない字をすぐ教えて抵抗を少なくするといった考え方もあり

ますが、これでは思考力を育てることができません。

その文字がその文中に使われているのは、文の意味内容と切っても切れない関係があるからです。

訓読みをする漢字には、送りがなのつくことがあります。これも低学年のころから注意を払う必要があります。

・「明るい」「新しい」のように、ことばを文字で表わすとき、漢字にかくれる部分と、かなで表わす部分とがあることを理解させ、「明」「新」は、「あかるい」「あたらしい」という意味であることをわからせる。「あか」「あたり」ではないことをはっきりさせなければならない。

・低学年から送りがなのきまりをおしつけられないようにする。送りがなのつくことばの例をくりかえして理解させる。

(3) 漢字の筆順を正しく

一年のときから正しい筆順に従って書く習慣をつけなければなりません。

・初めから原則をおしつけないで、一字一字について基準にかなった書き方を積み上げていく。

・低学年の字が基礎になるから、しっかりとのみこませる。

・漢字の画数(幾ふで書けるか)を数えながら書く練習をする。

・空中書写やノートに大きく書くなど、なるべくきん肉運動にうつたえてのみこませる。

・漢字書きこみなどのゲームによって、興味をもたせることもできる。
(お茶の水女子大学附属小学校)